

くすり博物館だより

NAITO MUSEUM OF PHARMACEUTICAL SCIENCE AND INDUSTRY

内藤記念くすり博物館 〒501-6195 岐阜県羽島郡川島町竹早町1

Tel:058689-2101 Fax:058689-2197 <http://www.eisai.co.jp/museum/>

企画展

女・子ども・
男のくすり

平成12年3月23日～11月26日



現在では比較的容易に治る病気も、昔は原因不明とされたり、悪霊の仕業と考えられたものもありました。そんな時代、まじないやお祈りはある種の「くすり」でした。一方、経験から導き出された民間薬も代々伝わり活用されてきました。経済的に余裕があれば、薬屋で売薬を求めたり、医師の治療に頼ることもできました。薬屋は、それぞれ工夫した家伝の薬を販売し、医師は中国伝来の漢方医学に基づいて患者を診察し、薬を処方しました。

江戸時代は、医薬の発展が決して十分とはいえない環境でしたが、健康に過ごすために、また病に打ち勝つために、人々はさまざまな努力や工夫を重ねてきました。今回の企画展では、江戸～明治時代の薬に関連する史資料を、女性・子ども・男性の分野に分けて紹介しています。これらの史資料を通じて、人々の暮らしの中で薬がどのようなものであったかを探りたいと思います。また、医薬そのものや健康への願いの中に、江戸～明治の人々と現在の私たちの間に共通するものがあることを感じ取っていただければ、大変うれしく思います。

- ◀写真は上より ◆房事養生鑑 江戸時代 <52×37>
◆きおう丸 富山・松本屋善兵衛 <10.5×7>
◆飲食養生鑑 江戸時代 <50×37>

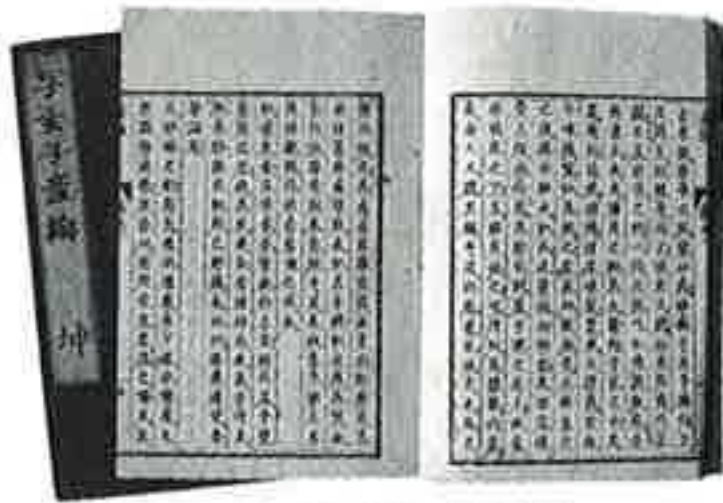
飲食養生鑑と房事養生鑑は対の錦絵で、それぞれ五臓六腑の働きと女性特有の身体の機能を紹介している。きおう丸は「奇応丸」とも書き、疳かんの虫などの小児薬として有名。

< >内は資料のサイズ。単位はcm。

女の病気とくすり

女性は出産という役割を担うため、その身体に生理や妊娠、分娩、閉経など男性にはない様々な機能を備えています。妊娠や出産についての知識は経験の積み重ねによるところが多かったのですが、衛生環境がまだ整っていなかった時代には、これらの機能に関わる病気は大変恐れられていました。しかし、江戸時代中期に賀川玄悦が研究を重ねて「回生術」という安産の方法を考案し、産科学は発展しました。また、彼は著作の『子玄子産論』の中で、子宮内の胎児が最初から頭を下にしている説を提唱しました。

なお当時、婦人科の軽い病気には売薬や民間薬を用いました。



▲『子玄子産論』
賀川玄悦著／明和3年(1766)



◀中将湯
曆入り広告。中将姫は不幸に耐えて蓮の糸で曼陀羅(まんだら)を織ったとされる伝説上の人物であるが、広告では華やかなイメージで描かれている。東京・津村順天堂／福岡・三苦啓次郎／明治36年(1903)〈27.0×38.1〉



◀実母散
婦人薬の薬袋。同名の薬が数多く出まわった。東京・喜谷市郎右衛門／大正～昭和〈14×8.5〉



◀蘇命散
産婆さんがお腹の大きな女性を診ている図。背景の掛け軸の中に薬の効能が書かれている。京都・福田／明治時代／〈37.2×25.7〉

こどもの病気とくすり

江戸時代には、こどもが無事生まれるかどうかはまず問題であり、ついで乳幼児期には生活環境によって寿命が左右されました。また、疫病の流行や飢饉、あるいは母親の乳が出なかったり、養ってくれる親を失うと、こどもの生命はすぐさま危険にさらされました。麻疹は特效薬がなかったため、まじないで危機を乗り越えようとしていましたが、天然痘は江戸時代後期から牛痘接種が実施されるようになり、次第に流行が減りました。

このような疫病以外のこどもの軽い病気は、「奇応丸」などの売薬で治療されました。



◀麻疹送り出しの図
人々のはしかの神を棧俵(さんだわら)に乗せて町から追い出す様子が描かれている。棧俵は俵の両端にあてる丸いわら製のふたのこと。文久2年(1862)／芳藤画〈39.6×24.9〉



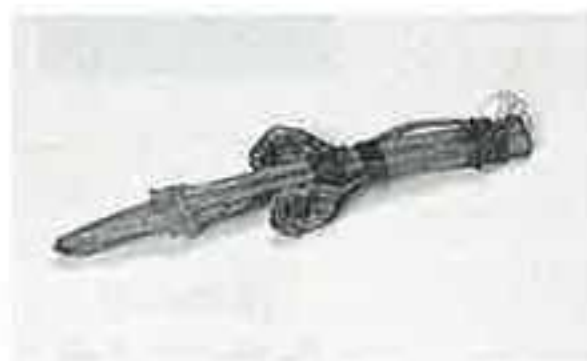
◀奇応丸・快通丸
店の周りに集まった人々が、薬をほめる様子を描いた錦絵広告。京都・西村峯洋軒／明治時代〈37.6×52.8〉



◀赤絵
桃太郎と犬が描かれ、後ろには「疱瘡は日本一のきびだんご お礼まいりのお供申さん」と書かれている。安政4年(1857)〈30×20〉

男のくすり

江戸時代には、病気の治療薬としての「男のくすり」はほとんど見当たりません。これは、男性特有の病気自体が少ないことに加え、例えば前立腺障害のような病気でも、排尿障害などの症状が注目されてしまい、男性特有の病気とは見なされなかったからと思われます。川柳などからは、当時の男性には強壯薬の人気の高かったことがうかがわれます。



◀ 蛤蚧(ごうかい)
<12×31×3>
鹿茸(ろくじょう)
<35×16>
海狗腎(かいくじん)
<21×9>

男と女の病気とくすり

梅毒は男女どちらもかかる慢性的性疾患のひとつで、患者の陰部・口腔粘膜からの感染のほか、母体からも感染します。15世紀コロンブスの探検隊が新大陸からスペインへもたらし、数年のうちにヨーロッパ全体に広まり、更に日本へも伝わりました。近代になって、サルバルサンという薬ができるまでは、初期の梅毒は水銀製剤によって治療が施されていましたが、かえって水銀中毒になることもありました。その場合は、一般には土茯苓(山帰来; 日本ではサルトリイバラ)が水銀解毒剤として用いられました。

新吉原娼妓梅毒病院検査之図 ▶

吉原は江戸市中に設けられた公営の遊郭で、幕末に衰退したものの明治以降も存続した。明治6年(1873)からは娼妓規則が制定され、月に2回の梅毒検査が実施された。国明画/明治16年(1883) <105×25>



薬草園から

庭でもベランダでも、あるいは室内でも緑が身近にあると心が休まります。ガーデニング・ブームと言われて久しい今日この頃ですが、皆さんの周りでも緑を育てている方は多いことでしょう。くすり博物館では、「薬草・ハーブを育ててみたい」という方々からの



ご要望にお応えして、1995年から“薬草栽培教室”を始めました。

この教室は1年コースで、薬草の栽培と利用を学ぶもので、毎月1回実際の作業を行います。作業と一口に言っても、4月の種まきや植え付けから始まって、散水や除草、そして植物が倒れないための土寄せ作業など多くのことを体験します。栽培する薬草はウコン、エビスグサ、ルバーブなど1年生の草で、収穫後は実際に薬草茶やジャムなどを作ります。苦勞して育てた薬草のお茶は一味も二味もおいしいようです。

コースを終了された方の中には、栽培教室終了者の集まりである“薬草友の会”

薬草栽培教室と薬草友の会の活動

に参加する方もいらっしゃいます。ボランティアとしてハーブ花壇の管理、薬草茶にする薬草の栽培と収穫作業など多くのお手伝いをいただいています。共通の趣味を持った方々と交流することはもちろん、ご家庭でも薬草やその他の植物を栽培して人生を楽しんでいらっしゃるようです。

こうした活動に年間を通して参加するのは大変なことですが、それでも希望される方は多く、いつも定員を大きく上回る応募があります。教室を終了された方は既に150人を越えました。次年度の栽培教室の募集は毎年2月に行います。ご興味のある方はその時期にお問い合わせ下さい。

薬用植物園 主任 白井英夫

「冬の部」「春の部」に引き続いて、「夏の部」「秋の部」にもたくさんの応募をいただきましてありがとうございました。優秀な作品が多く、今回も力作揃いです。秋の部の作品展を2月15日から3月15日まで展示館2階で入賞作品の展示をしました。植物の実や紅葉した樹木をとらえるなど、秋の季節感を表現した作品をご覧ください。



夏の部
「夏日」
渡辺昌昭様



秋の部
「錦秋の館」
各務のぼる様



その他、入賞作品はエーザイのホームページでもごらんいただけます。

<http://www.eisai.co.jp/museum/>

この図録は、江戸時代の庶民のくすりを女性・子ども・男性といった分野に分けて紹介しています。定価800円。（郵送ご希望の方はハガキかFAXでお申し込みください。送料はお客様の負担となります。代金は到着後払い）



TOPICS

■薬膳弁当のご案内

身体によい薬草を用いた薬膳弁当を、予約によってエーザイ川島工場の厚生センター食堂で召し上がっていただけるようになりました。食事をしながら健康談義に花を咲かせてみてはいかがでしょうか。種類は4種類（1000～3000円）あり、平日は1名から、土日祭日は20名様以上での予約が必要です。お問い合わせはカワシマ商事（TEL058689-2881）まで。

■テレビで紹介されました！

テレビ愛知のニュース番組「ニュースアイ」の（ミュージアムへ行こう）というコーナーで、2月1日に博物館が紹介されました。三宅康夫館長がくすり博物館の見どころや活動内容について解説しました。

■『日本製剤技術史』連載

三宅康夫館長は『日本製剤技術史—戦後50年の軌跡—』を、(株)じほう発行の「PHARM THCH JAPAN」に昨年9月より1年間の予定で連載中です。第二次世界大戦後から、現在の技術水準に至るまでの経緯を概説します。

■薬草説明会のご案内

今年も4月～11月までの期間、花や実をつけるなど、その月に見頃となっている薬草を実際に観察し、わかりやすく解説します。参加希望の方は毎月第1日曜日10時までに、くすり博物館の受付までおこしください。事前の予約は必要ありません。説明時間は10:00～11:00頃まで。参加費無料。

■夏休み親子教室のご案内

毎年恒例となりました夏休み親子教室を、今年も7月29日(土)・30日(日)に開催する予定です。各日定員20組、締め切りは7月14日。参加希望者全員の氏名・学年(年齢)と、住所・電話番号・参加希望日を記入して、往復はがきでお申し込みください。薬草園の植物を使ってポマンダーやリース作りなどのハーブ工作を行います。



資料・図書寄贈者ご芳名

熱田神宮宝物館 一宮市博物館 岩下哲典 宇津救命丸(株) 大竹綾子 大阪人権博物館 柿本和廣 三光丸同盟会(株)じほう 瀧野市立歴史文化資料館 田中俊弘 道修町資料保存会 富山県立山博物館 長崎純心大学 中島路可 中山沃 奈良県立民俗博物館 古川明 帆足道代 正橋剛二 水谷医院 水野瑞夫 宮崎惇 (敬称略)

～ありがとうございました～

館長 三宅康夫 学芸員 稲垣裕美 学芸員・司書 野尻佳与子(編集担当) 伊藤恭子 庶務 森田麻起子 小島敦子(見学受付) 市橋由志子 薬用植物園 主任・学芸員 白井英夫 栽培管理 栗本省三 荻谷辰行 顧問 青木允夫 アドバイザー 逸見誠三郎 内藤記念くすり博物館 開館/9:00～16:00 休館/月曜日・年末年始(12/28～1/8)